

会長対談企画第2弾！

岡山弁護士会では、今年度、岡山県内で活躍されている方々の現場に行き、水田会長が対談を行っています。今までの仕事のことやその方のポリシー等様々なお話をするなかで、弁護士及び岡山弁護士会に期待することをうかがう企画を行っています。

第2弾として、平成28年8月30日、RSK（山陽放送株式会社）の代表取締役社長である原憲一さんにお話をうかがいました。



～ RSK代表取締役社長 原 憲一 さん ～

《聞き手》

水田：水田美由紀 岡山弁護士会会長 田中：田中将之岡山弁護士会副会長

《話し手》

原：原憲一さん

○水田 略歴を拝見しましたが、これまで報道一筋ですね。

○原 そうですね、報道系です。最初、アナウンサーで入社したんだけど（一同「えっ！？」）、すぐ報道に異動しまして、ラジオが15年、テレビ報道が15年、あとは管理職という感じです。

○水田 まずカイロ支局勤務が特徴的ですね。

○原 JNN^{*1}ってTBS、RSKを含め28放送局あるんです。ただ世界中に情報を収集するために支局を持つのにTBSだけじゃちょっと難しいです。だから、JNNで支局を作って、28局のうち大きい局から順番支局を決めていくんですよ。例えば、ロンドンとかね。

RSKは最後に残ったベイルート。そこへまず初代が行ったんですよ。そこですぐ戦争になって、それでカイロに移って、私が1990年に5代目カイロ支局長として赴任しました。大体任期3年ぐらいなんですけどね。90年から93年まで。

ちょうど東西の冷戦交渉が崩れて、ベルリンの壁が崩壊して、世界は緊張が緩んでい

*1TBS テレビをキー局とした民放ニュースネットワーク

くときだったんです、緊張緩和の時代。

それで、平和が来るだろうと思ってい
たら、実は逆で、東西のビッグパワーが
融和したもんだから、それで押さえつけ
られたところはいろんなところで火を
噴き出したん
です。

だから、私がカイロに行ったらすぐイ
ラクがクウェートに侵攻したんです。それ
も東西冷戦の時代は、両陣営が押さえて
ますから、クウェート侵攻なんて絶対
できないですね。そういう図式でサラ
エボ、もちろんパレスチナも、それ
からソマリア、ルワンダ、紛争があ
ちこちで起きて、3年間でそういう
紛争地ばかり行ってたんです。

だから、一番激しい時代の特派員
になります。

○水田 ちなみに何人ぐらいいらっ
したんですか。

○原 1人。

○水田 え、カイロ支局1人なん
ですか。

○原 あとはエジプト人のスタッフ。
助手がエジプト人。カメラマンも
エジプト人。どこ行くのも1人。

○水田 2年間は外ということ
ですが、戦闘地……。

○原 一番長くいたのがサウジ
アラビア。クウェートに取材した
くてもイラク軍がずっと国境を
押さえてますから、入れない
です。それで。

そこはアメリカ軍の基地があ
って、そこでは記者発表もあ
ったから、そこで発表を聞き
ながら原稿を書くんです。日
本に行く中継映像でレポート
を送って、一番多いときは
1日4回ぐらいレポートを
するんです、ここから。

それで、1991年1月17日に
戦争が始まって、2月27日
に戦争が終わるんだけど、
その前後にクウェートに各
国の記者が入っていくん
です。

どこが一番早いか競争する
わけですよ。それで結局C
BSには負けたけど、日本
人記者の中では我々は
一番にクウェートに入
って、クウェート一
番乗りという称号を
もらったわけ
です。それが3年
間の中で一番
大きい仕事
でね。

○水田 やっぱ報道、ジャー
ナリストに対しては、みな
さん配慮する
のですか。

○原 ジャーナリストだから
狙うケースもあ
るんです。敵を
殺しても余り
ニュースは流
れないけど、
日本人の
ジャーナ
リストを
殺すと相
当ニュース
になる
から。だから、
ジャー
ナリスト
だから
安全を
確保さ
れるこ
とは
ない
です。
難し
いこ
ろ
です。

○水田 戦闘地の取材という
のは、要するに戦争の現場
に行かれるということ
ですね。

○原 そうです。人間は戦
場、そういう緊張環
境の中
では激
しいこ
と
し
ま
す
か
ら
ね。
一
番
激
し
か
つ
た
の
が
ル
ワ
ン
ダ
の
虐
殺
で
す。
ル
ワ
ン
ダ
は
斧
で
殺
す
ん
で
す。

弾（たま）は高価
でしょう。だから
斧を使う。

我々の行ったところ
が、村中が教会に
集められて斧で
切られた現場
だから、我々
行ったときは
まだ死体が
ずっとある
わけ
です。
血が
全部
固ま
って
る
か
ら
血
の
海
で
す。
それ
が



アフリカの高温の中ですから、どんな感じが想像できると思いますけど、とてもじゃないけど目を背けたくくなります。子供もいますからね。

○水田 今回思ったんですけど、本当に日本も戦後70年以上たって、誰も具体的な戦場というものを知らなくて、イメージだけで、でも原さんはこういう現実の戦争というのを見られるんですね。

○原 死体を見ることがないですよ、日本で生活してると。
そういう戦争のむごたらしさ、怖さですかね、死体見ると一発ですよ。なかなかこっちで平和の中でも理屈では片づけられない現実があるっていう感じですよ。

○水田 重い言葉ですね。
そのお話、もっともっと伺いたいところなんですけど、時間の関係もありますので。まったく話は飛びますが、今年ギャラクシー賞を受賞された番組「メッセージ」ですが、これは原社長の肝（きも）いりてつくられたというふうにお聞きしました。

○原 今のテレビって、どこのチャンネルも同じタレントが順番に出ていて、同じネタ回しで、同じギャグで、同じトーンでやっていて視聴率を稼いでいくというね。

それはそれで娯楽番組としていいのですが、テレビはそれだけって思われると、やがてインターネット社会になったときに、インターネットのほうが情報多いですから、テレビよりインターネットのほうがいいやっこになるんですよ。

テレビがなぜいいかという、物の見方まで一緒に合わせて見せてくれるから、やっぱりテレビから情報を仕入れるっていうふうになってもらわないと、我々の存在意義が無いです。

テレビはいろんな情報の中から取捨選択して、今この時代に一番大事な情報は何だということを選んで出していかなければだめですね。

そういう大事な作業はあるのに、全部娯楽番組では、テレビの良さが分からないから、そういう中で我々はやっぱり地域の抱えてる悩みとか喜びとか感動とか、そういうものをやっぱり伝えていく番組をやらないと、テレビ全体が駄目になっていくという危機感を持っています。

ドキュメンタリー番組を各局、制作しているんです。ただ、放送時間が深夜だったり余りにも外れ過ぎてる。それじゃちょっといけないんじゃないかなということ。

ゴールデンタイムでドキュメンタリーの放送をどこかの局がやらないといけないと、



全国で120ぐらいテレビ局があるんですけど、それをどこの局もやらないんで、じゃあ、山陽放送でやりましょうと。

やることによって、どの程度経営に悪影響があるかというのを実験してみましようということでした。

○水田 大胆ですね、実験してみよう、ですか。

○原 実験なんですよ。ドキュメンタリーってやっぱり視聴率は4%前後

なんです。覚醒剤を取り上げたときは9.4%ありましたけど。

マツコデラックスさんを放送すると14%、15%ですかね。すると、スポットの値段が全然違います。じゃあ、本当にドキュメンタリーをやることによって、売りが減るか、もしくは視聴率が下がるかっていうのを4年間やってみたら、全く関係ないです。

例えば、売りは伸びてるんですね、この4年間。それから視聴率もこの4年間でいくと、どっちかというと伸びてる。たまたまかもしれないけども下がってはいません。

だから、1週間に1時間だけ低視聴率番組やっても全然経営には影響ないから、「皆さんやってみてはどうですか」って言ってるんですよ。

でも視聴率が3%でもね、換算すると5、6万人の方が見てます。すごい人数ですよ。例えばマスカットスタジアムにいっぱいお客さんを入れて、そこでテレビ流してるみたいな感じですね。

そりゃ十何%っていったら、とんでもない数字だけど、でも見られ方がね、ドキュメンタリーを見る何万人かの人ってじっと見てますから。じっと見て涙流したり怒ったり、非常に気持ちを入れ込んで見てくれるから。

見た後、「山陽放送はおもしろいこともやるけど、足場のしっかりした、どんとしたことやるね」というイメージのほうが、我々にとってはプラスなんですよ。そういうのを4年間やると、あの「メッセージ」をやってる山陽放送という見られ方をしますから。それは「山陽放送は地域を見つめてます」と1,000回、2,000回スポット打つよりも、たった1本の番組流すだけで、そういうメッセージが伝わるんですよ。

で、「メッセージ」というのは、我々のメッセージも実は視聴者に伝えているからメッセージなんです。

ゴールデンタイムで4年間も愚直にやり続けてるところを「ギャラクシー」は評価してくださいました。民放でありながら、そういうことをやるというところに拍手を送りましょうということでの表彰されたわけです。

○水田 実験を現実に4年も実行されたんですね。

○原 そうそうそう、社長がそう言わないといけませんよ。

少ない記者でよくやってると思いますが、まだまだ取り上げなきゃならない問題が山ほどあるんです、虐待とか、高齢者問題とか。



○田中 今度、「メッセージ」も担当している宮崎カメラマンが、ハンセンの関係で岡山弁護士会で講演していただくことになっています。

○原 彼とは30年前ぐらい、ずっと取材一緒にして、長島に毎日のように通ってました。当時は、誰も長島に行かなかったんですよ、(病気が)伝染するかもしれないと。

タクシーの運転手も「あの島はもう

こらえてくれ」「絶対行かない」と（言ってて）。行っているのはうちの会社だけでした。

○水田 最後のまとめというわけではないですけど、報道の自由という点からして、何か昨今思われることはありましたか。

○原 太平洋戦争の報道のあり方というのがね、国民を間違った方向に放送が導いていきました。

その後、民間放送ができて、物の見方の多様性を示そうということになった。

ただそこでは、報道の自由っていうのが担保されないとだめだということなんですけど、日本の報道の自由さっていうのは、世界のレベルに比べると随分下にランクされてるので、これちょっと残念だと思ってます。やっぱり特定秘密保護法とか、安保法案とか、いろんな政府の情報取材に対する規制っていうのは他国には余りないところがありますから。

ただ、マスコミも相当抵抗をしてますから、抵抗するためには、みずからを律しないとイケない。プライバシーを侵害しちゃいけないとか、メディアスクランブルで加害者、被害者の人権を無視するようなことがあったらいけないとか。

我々は正しい報道のあり方っていうのを常に求めているんです。

やはりメディアはいろんなところをつついていくっていうのは、長い目で見ると大事なことなのです。そういうのは我々も常に持ち続けて、県であろうと市であろうと国であろうと不条理は不条理として追及していかなきゃいけないという姿勢は持っています。

○水田 私どもも報道の自由に対する制限に関しては、やっぱり民主主義の根幹ですので、いろいろ問題があれば直ちに会長声明を出すなど対応をしていきたいと思ってます。最後に岡山弁護士会に何か期待することなどありますでしょうか。

○原 今、特に、女性であるとか子供の貧困とか、弱い立場の人が依然として多い。彼らの非常に小さい声が、もう消え入りそうな声がありますよね。そういうちっちゃい声でも聞き漏らさないっていうか、弁護士さんもやっぱりきっちり拾ってさしあげて、守ってあげて欲しいという感じです。我々も同じで、そういう姿勢で常に報道もしています。我々も日常の業務にどうしても追われて、急いで拙速に番組をつくっていったりもするけど、こつこつこつこつ、やっていく地道な弁護士活動もそうだと思いますけど、取材だっってもこつこつやってないといい報道はできないので。

それは常に若い人にも言っているのですけど。近道はないですね、報道は。弁護活動もそうでしょうね、近道ないでしょうね。

—終—